

●争奪戦で島津軍勝利

えびの市は北に矢岳高原、南に霧島連山を望み、その間に加久藤盆地が広がる。中央部を流れる川は、本県で唯一西に流れ、鹿児島県の吉松町などを経て川内市から東シナ海に注ぐ川内(せんだい)川である。

ここは昔から真幸米、加久藤米で知られる米どころであった。今も水田が広く「えびの米」の銘柄で市場の評価は高い。それだけ農民の米作りに対する執念は強かったと思われる。あちこちに祭られる田の神がそのことを伝えている。

同盆地には周囲の飯盛山、白鳥山、栗野岳、韓国岳などからの火山噴出物が広く分布しており、それらが風化して砂、泥などの低地性堆積(たいせき)物がたまった。その上に山地から水が流れ込み、絶好の稲作地帯をつくった。

その穀倉地帯が戦国時代、争奪の的になった。元亀三(一五七二)年、日向の戦国大名・伊

東氏と、薩摩の島津氏の間「木崎原の合戦」が起こった。伊東氏が米どころ・えびの地方への進出を目指したのが発端だった。伊東氏は三之山(現在の小林市)に拠点を置き、同年五月、大軍を動員した。戦いは島津軍の大勝利となり、伊東軍は三之山に退却した。

合戦場となった木崎原にはその後、多くの戦死者の霊を供養するため、六地藏塔が建立された。無銘の石塔で、高さ二・二八^{メートル}。時を経た今も、古戦場である森の中に威厳を持って立っている。近くには、首を埋葬したという首塚もある。

この戦いで島津氏は南九州に覇権を立てた。一方伊東氏は敗戦の後、天正五(一五七七)年、豊後に逃走する。説話も残されている。

伊東軍に柚木崎丹後守という武将がいた。味方の劣勢に奮起した丹後守は乱戦にまぎれて島

津軍の大将・義弘に迫り、やりをふるって突きかかった。あわやと思う一瞬、義弘の馬がひざをつき、やりはそれてかぶとをかすった。

丹後守は義弘の馬回りの武士に討たれた。義弘の馬は主人の危機を救い、「ひざつき栗毛」と呼ばれて大切に養われた。八十歳まで生きたと伝えられている。

木崎原古戦場跡は、現在のえびの市池島地区にある。市文化センターの交差点からしばらく行った所で、古戦場の記念碑があり、公園化されている。トイレや駐車場も設けられており、一九九八(平成十)年、県指定史跡となった。

甲斐亮典



六地藏塔が立つ木崎原古戦場跡。往時がしのばれる